２．歴史的風致の内容

ー１　城下町の祭礼等にみる歴史的風致

（１）はじめに

新町は熊本市中心部の熊本城の南西、城と坪井川の間に位置し、古町はその南側で坪井川と白川の間に位置する。この新町・古町は加藤清正の熊本城築城の際に城下町として整備されたものである。清正は坪井川を改修して水堀とすることで南西側からの防備とするとともに、舟運として利用することで町人町・商人町である新町・古町発展の基礎とした。

現在もその特徴的な町割や地名を残している。江戸時代の建物は明治10年（1877）の西南戦争により焼失してしまったものの、その後、明治時代から昭和初期に建築された歴史的建造物が江戸時代の町割りの中に点在し、特徴的な景観をつくりだしている。

新町の北側、旧熊本城域西端の藤崎台（現藤崎台野球場周辺）にかつて藤崎八旛宮があった。西南戦争による焼失後、現在地（井川淵町）へ移転したが、新町は熊本城内に藤崎八旛宮があった時期から藤崎八旛宮の祭礼と深い関わりを持ち続けている。加藤清正によって再興された藤崎八旛宮の神幸行列において、新町が獅子舞を奉納し、それ以降現在も藤崎八旛宮の例大祭において奉納が続けられている。藤崎八旛宮が現在地に移転し、城下町であった新町・古町は例大祭における神幸行列の道中となっている。

このように、熊本城下に形成された城下町と歴史ある建造物、熊本城を築いた加藤清正が再興したと伝えられる祭りが一体となっており、熊本の秋の風物詩として親しまれている。

「熊本之図」（文久 4 年（1864））

※原図は文化 2 年（1805）

（熊本博物館所蔵）

（２）歴史的風致を形成する建造物

①藤崎八旛宮の例大祭に関わる建造物

ア　藤崎八旛宮

藤崎八旛宮は、石清水八幡大神を茶臼山（現在の藤崎台球場）に勧請したことに始まる。

藤崎八旛宮　鳥居と楼門

南北朝期や戦国期には陣営や戦場となって荒廃し、社領のほとんどを失ったが、加藤清正によって寄進や放生会の神幸行列の再興がなされたと伝えられている。加藤家の改易後、細川家も引き続き寄進をしており、城下の総鎮守として信仰された。明治10年（1877）の西南戦争で焼失し、現在地の井川淵町に移転した。現在の諸社殿は昭和11年（1936）に鎮座1,000年を期して造営されたものであることが昭和10年（1935）4月22日の九州日日新聞の記事から分かる。記事によると、前年の昭和９年（1934）より本殿の修理及び申殿の新築に着手し、９割ほど進捗。翌10年（1935）は拝殿の改築に着手する予定と記載されている。昭和10年（1935）12月17日の記事には拝殿の上棟式の様子が記されており、その後幾度か改修し、現在に至っている。

イ　藤崎八旛宮例大祭御旅所（能楽殿）

江戸時代、御旅所は藤崎八旛宮の本社（現在の藤崎台）から西に延びる段山の突端近くにあり、この御旅所（旧御旅所）まで神幸行列が行われていた。

御旅所　能楽殿

西南戦争による焼失で藤崎八旛宮が移転した際、御旅所も現在地に移転した。

地元の古老によると、昭和初期ごろには、御旅所に能楽殿が建てられていたということだが、確認できる記録としては、昭和22年（1947）11月１日に撮られた航空写真が一番古いものとなる。神幸行列における藤崎八旛宮から御旅所までの行程（朝随兵、P.90参照）が到着後、ここで金春流・喜多流の能が奉納される。

②特別史跡熊本城跡

熊本城跡（特別史跡）

加藤清正（かとうきよまさ）が、茶臼山（ちゃうすやま）全体に築いた近世城郭である。着工の時期は、通説では慶長６年（1601）とされ、同12年（1607）に完成したと伝えられているが、天正年間（1573～1592）には既に着工されていたという説もある。城域は、周囲5.3km、面積98ha、坪井川と井芹（いせり）川を内堀に見立て、白川を外堀としている。

加藤氏から細川氏を経て明治維新を迎え、明治の初めに鎮西鎮台（ちんぜいちんだい）（陸軍）用地となった。西南戦争では籠城戦の舞台となり、薩軍の攻撃を受けながらも、50日以上にわたって耐え抜いた。

昭和８年（1933）に国の史跡に指定され、昭和 30 年（1955）に特別史跡となった。平成 28 年（2016）熊本地震では、石垣の約３割に崩落や緩みの被害があったほか、全ての建造物で瓦の落下や壁の剥落があり、今後約 20 年かけて復旧する予定となっている。

③熊本城

宇土櫓

大小天守閣

熊本城は加藤清正によって築城された近世城郭で、慶長10年（1605）ごろの『慶長国絵図』にはすでにその名称が見られる。加藤清正の跡を継いだ加藤忠広が寛永9年（1632）に改易（所領、役職等を取り上げられること）されると、小倉から細川忠利が入国し初代熊本藩主となった。このあと明治4年（1871）の廃藩置県まで200年以上にわたって細川氏が熊本を治め、熊本城は江戸時代には櫓49、櫓門18、城門29があったと伝わるが、明治維新後の建物払い下げや鎮台（陸軍）による解体、明治10年（1877）の西南戦争開戦直前の火災などにより、現存する建造物は宇土櫓をはじめとする13棟である。３重５階、地下１階の宇土櫓は築城当初から現存する唯一の多重櫓で、構造も天守に相当する特徴をもつこれらの建造物は昭和８年（1933）に国宝に指定されたあと、文化財保護法の制定によって国の重要文化財に指定

された。昭和35年（1960）には天守閣が再建され、昭和50年（1975）以降、明治時代以後に撤去された石垣や櫓などの復元が進められ、往時の姿に近づいたが、平成28年（2016）熊本地震により、13棟の重要文化財建造物全てで瓦の落下等の被害が生じ、現在復旧工事を行っている。

④町屋建物などの歴史的建造物

新町・古町には数多くの歴史的建造物が現存するが、ここでは主に藤崎八旛宮例大祭の神幸行列の道中やその周辺に位置する建造物を示す。

ア　吉田松花堂

江戸時代から続く薬屋で、主屋の棟札によると、西南戦争直後の明治11年（1878）の建築であることが明らかである。明治期には書院や茶室が建てられた。約190年の歴史がある「諸毒消丸薬」が現在もここで製造・販売されている。

吉田松花堂

道路沿いに長い土塀や格式のある玄関があり、西側は町屋で東側は武家屋敷風の造りとなっている。内部は非公開であるが道路沿いに「諸毒消丸」の大きな看板があり、この通り一帯のランドマークとなっている。

イ　長崎次郎書店

長崎次郎書店は明治７年(1874)創業の書店で、当初建物は明治10年（1877）の西南戦争で焼失した。現在の建物はその後再建されたものであるが、再建時の棟札等は残されていない。登記簿には「明治四拾五年弐月弐拾六日受付」と記載があり、このことから少なくともそのときまでに再建された建物である。平成10年（1998）に国の登録有形文化財に登録され、現在も書店として使われている。色使いや模様（中国風）が特徴的で、ファサード（建築物の正面部分）は、三菱合資会社長崎支店唐津出張所（佐賀県指定重要文化財）などを手がけた保岡勝也のデザインである。店舗の前を通過する市電と合わせて、多くの市民にとって熊本の原風景となっている。戦時中は新町獅子の諸道具を保管していたといわれる。

長崎次郎書店

熊本市電と長崎次郎書店

ウ　清永本店

清永本店は旧薩摩街道で江戸時代から昭和初期にかけて熊本で最も賑やかな通りの一角である西唐人町に位置する。

清永家は宝暦年間（1751～1764）から続く商家であり、建物が建てられたころは荒物商であった。

清永本店

主屋は間口約6間、奥行き14間木造２階建ての切妻造で、中庭が設けられ、さらに奥に離れの座敷がみられ、この地区では最も大きな町屋のひとつである。建物は西南戦争後に建てられ、棟札に明治11年（1878）と記されている。

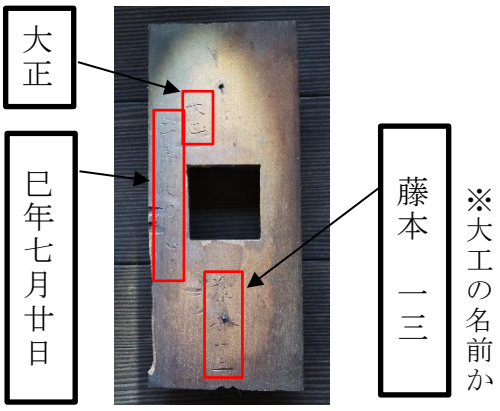
平成28年（2016）熊本地震により被害があったが、復旧工事が完了している。

エ　西村邸

西村邸は清永本店と同じく西唐人町に位置する。清永本店の清永家から分家し、油屋を営んでいたため、敷地東西の境界に沿ってレンガ造の防火壁が設けられている。敷地南側道路に面して2階建ての土蔵、中庭を挟んで主屋がある。主屋は間口５間半、奥行き９間の木造入母屋造で地上２階、地下１階建である。北側は坪井川に面しており、かつて舟運が盛んだったころ、地下で荷揚げをしていた。

西村邸

建築年代については、平成28年（2016）熊本地震からの復旧工事の際、一時取り外した当初部材に「大正巳年（1917）七月廿（20）日」と刻まれており、大正６年（1917）に建築されたことが分かる。



部材

オ　ナチュラル＆ハーモニック・ピュアリィ、塩胡椒

建物が３棟あり、西側の建物は古材を再使用し、平成に建てられたものである。登記簿に「明治弐拾八年九月九日登記」と記載がある中央の建物が一番古く「明治四拾参年拾壱月拾弐日受付」と記載がある東側の建物も、遅くとも明治の末には建てられていた。

ナチュラル＆ハーモニック・ピュアリィ
明治 28 年（1895）登記された中央の棟

中央と東側の２棟の建物は地下１階（後述の荷揚げの際に利用していたスペースの名残）、地上２階建切妻造で中央の建物が間口４間半奥行10間半、東側が間口５間奥行き10間の建物である。

建物北側に坪井川が流れ、かつては船着き場があり、地下で荷揚げをしていた。

現在は西側２棟がオーガニックの商品を扱う店舗及びレストラン、東側がフレンチ料理レストランとして活用されており、唐人町界隈の景観に無くてはならない建物である。

塩胡椒
明治 43 年（1910）登記された東側の棟

カ　ピーエス熊本センター（旧第一銀行熊本支店）

この建物は、旧薩摩街道沿いの中唐人町に位置する。第一銀行熊本支店として全国の第一銀行の設計を手掛けた西村好時（にしむらよしとき）の設計で清水組（現清水建設）が施工したことが棟札の記載により判明し、清水建設の社史に大正８年（1919）５月竣工と記されている。大正８年（1919）５月27日の九州日日新聞の記事には前々日の25日に新築の披露がなされ、翌26日に営業を開始したとある。

ピーエス熊本センター

また、坪井川に面しているため地上２階地下１階建で連続するアーチ窓を用いており、石と煉瓦で仕上げた外観は美しく、地域のランドマークになっている。

建物は一時解体の危機にあったが、保存を願う市民の署名活動などもあり、ピーエス株式会社が購入した。平成13年（2001）に文化財的価値の保存を目指した改修を行い、「PSオランジュリ」という名称でオフィス兼ショールームとして開業した。

キ　藤本邸

藤本邸は新鳥町通りに面する、西南戦争後に建てられた町屋であり、登記簿にて、「明治参拾弐年弐月弐拾四日登記」の記載が確認できる。

主屋は間口５間半、奥行き９間の木造２階建、切妻造である。建築当初より米屋であったことから、道路に接する１階北側部分はすべて土間であり、開放的である。

藤本邸

ク　冨重写真所

冨重写真所は、明治３年（1870）に冨重利平が開業した写真所である。利平は、日本最初期の写真家・上野彦馬の門弟であり、西南戦争で焼失する前の熊本城の撮影や明治時代の風景や人物など数多くの貴重な写真を残した。明治９年（1876）に現在地に写真場を新築したが、翌年の西南戦争で写真場は焼失した。一時別の場所に仮店舗を設置し営業していたが、政府が戦跡の写真撮影を依頼したことにより、現在地に間口4.5間奥行き７間の木造２階建ての写真場を再建することになった。

建築年代の根拠となるものは発見されていないが、明治 10 年（1877）の建築と言われており、現在もこの建物や当時の写真器材、撮影された多くの写真が残っている。明治 20 年（1887）に撮影された集合写真の背景に写真所が写っているものがこの建物の写真資料で一番古いものである。

冨重写真所

写真場はスラント（斜めに傾斜がついていること）スタジオと呼ばれ、北向き傾斜屋根の大きなガラス窓からの自然光で撮影を行っていた。

ケ　大石蕎麦

大石蕎麦

大石蕎麦店は創業が江戸末期とも言われており、建物の中心部分は江戸末期に建てられたもので西南戦争時も無事であったと伝えられている。建物は間口２間半奥行き 10 間半の木造２階建て切妻造である。明治期と昭和 10 年（1935）に増築を行い現在に至る。詳しい記録は残されていないが、昭和 37 年（1962）８月 27 日に撮影された航空写真において、建物の屋根が確認できる。

なお、現在は廃業している。

コ　早川倉庫

この建物を建てた岡崎家は米屋町周辺において酒店、醸造場を営む地主であり、近代の熊本で政治・商業界において多大な功績を残した家である。西南戦争の復興のなか、岡崎酒店酒類醸造場として建てられた建物のうち、南側市道に面した梁間８間、桁行 12 間の土蔵造の現在本宅棟と呼ばれる建物は、棟札に明治 10 年（1877）新造と記されている。本宅棟北側奥に位置する１号倉庫は梁間６間、桁行 10 間の土蔵造であり、棟札に明治 11 年（1878）３月新造と記されている。西側の建物（２号倉庫）も同規模の土蔵造であり、棟札に明治 13 年（1880）９月新造と記されている。現在早川倉庫として倉庫業、イベントスペースとして多くの人が訪れている。

早川倉庫

サ　明八橋（めいはちばし）

元は新三丁目橋という木板橋であったが、明治８年（1875）に石橋（眼鏡橋）に架け替えられ、明八橋と呼ばれるようになった。明治 13 年（1880）に作製された「熊本全図」にその名前が見える。

平成２年（1990）に下流に新しい橋が架橋され、明八橋は歩行者等専用橋として保存されることになり、現在に至る。

石工は橋本勘五郎で、ほかに、ともに国の重要文化財である霊台橋（熊本県下益城郡美里町）や通潤橋（熊本県上益城郡山都町）、また宮内省に勤めていた際には、万世橋（東京都千代田区神田町）や浅草橋（東京都台東区浅草町）などを手掛けた。

明八橋

シ　野田市兵衛商店

この建物は西南戦争後に熊本に移って馬具商から始まり、現在は様々な事業を展開している野田市兵衛商店の本店であり、商店が明治 40 年(1907)に醤油醸造部門を現在地に移す際、醸造場として建てられたものである。現在の外壁は白漆喰であるが建設当初は黒漆喰であったという。商店が所蔵している大正５年（1916）に撮影された写真に黒漆喰の本社が写っている。

野田市兵衛商店

建物北側の市電開通に際して、大正 13 年(1924)前後に軌道敷設工事による道路拡幅に伴って後方へ曳家が行われている。

ス　早野ビル

早野ビルは鉄筋コンクリート造４階建延べ床面積 710 ㎡で、大正 13 年(1924) 5 月 14 日の九州新聞の見出しには熊本最初のビルデングと謳われ、13 日に上棟式が行われたことが記事になっている。また、熊本で最初の貸し事務所と言われている。

早野ビル

建物はＬ字型の平面で１階には住宅部分と貸店舗が２室、２階から４階までは計 17 室の貸事務室がある。外壁面はモルタルと擬石塗で仕上げられており、市電の開通とほぼ同時期であったことから、それまでの古い町並みの中で電車と並び、近代の熊本の顔として偉観を呈する建物であった。現在も貸し事務所として使用されている。

セ　旧住友銀行熊本支店

旧住友銀行熊本支店

建物は大正から昭和にかけて坪井川の水運により経済発展を遂げ、熊本市の金融街であった界隈の一角にある。昭和９年(1934)に建設された鉄筋コンクリート造地上３階地下１階建て、延べ面積が480.27 坪の建物である。昭和９年(1934)12 月５日の九州新聞に新築披露式が４日から３日間にかけて２千数百名を招待して執り行われることが書かれている。

正面のロマネスク風の三連アーチとそれを支える４本の疑似コリント式の円柱が特徴的な外観である。設計者は住友ビルディング、大阪証券取引所を設計した長谷部竹腰建築事務所（現日建設計）施工は大倉土木（現大成建設）である。

平成 30 年（2018）１月 15 日に三井住友銀行熊本支店が移転するまで銀行として使用されていたが、建物の容姿を損なわないことを条件として売却され、新しい活用が期待されている。

ソ　新町会館

新町会館

新町会館は電車通りに面する町屋で、建物は間口３間、奥行き４間の木造２階建、切妻造である。大正年間(1912～1926)の建築といわれているが、登記簿による「昭和拾七年拾弐月拾八日登記」の記載が確認できる一番古い記録である。

新町獅子舞のために活用してほしいという所有者の意向により、平成 29 年（2017）７月から、獅子の展示、獅子の歴史に関するパネル展示が行われている。

（３）歴史的風致を形成する活動

藤崎八旛宮例大祭

①藤崎八旛宮例大祭の概要

例大祭は放生会に起源をもち、江戸時代には放生会という名称が多く使われた。江戸時代は藤崎八旛宮の西側、段山の御旅所（旧御旅所）までの神幸行列と、近くの祓川（現在は流路が変更されている）で放生会が行われていたが、明治時代に入ってからは、神仏分離令により仏教行事が廃止されたため、放生会も廃止となった。

放生会の様子（「熊本年中行事図絵」明治時代初期より）

明治10年（1877）の西南戦争により、藤崎八旛宮が焼失し移転、段山にあった御旅所も現在地に移転した。移転に伴い神幸行列の行程の変更などがあったが、現在も毎年９月中旬に各種奉納が続けられている。

現在、例大祭のメインイベントとなっている神幸行列は、南北朝時代以降藤崎八旛宮が衰退して開催が難しくなっていたものを、加藤清正が朝鮮出兵から無事帰ることができた報恩として再興したと伝えられる。神幸行列では、藤崎八旛宮から新町の御旅所まで、現在の繁華街や旧城下の新町・古町などの歴史的建造物を背景に練り歩きながら往復する。神幸行列の目的地となる御旅所には能楽殿があり、ここで能が奉納されるほか、藤崎八旛宮の境内などで神楽・献茶・日本舞踊・いけばななどさまざまな奉納が行われる。

神幸行列に加わる「随兵」は、神幸のお供をする武者行列のことで、加藤清正が自ら百騎の武者を連れて神幸に随行したことが始まりと言い伝えられている（『加藤家伝　奇の書』明治13年（1880））。例大祭の神幸を見に行くことを「随兵を見に行く」といい、祭りのことを随兵で代弁することもある。また、随兵は熊本独特の季節の言葉「随兵寒合」（藤崎八旛宮例大祭の前後から朝夕めっきり冷え込んでくること）にも用いられており、熊本の秋の風物詩として地域に深く根付いている。行列の最後には特徴的な飾りをつけた「飾馬」が続き、勢子（馬を御し、囃す人）が馬を追い立てる「馬追い」も有名である。

藤崎八旛宮の例大祭は、多くの地域住民や奉納団体が参加する、熊本を代表する祭りの一つとなっている。

②江戸時代の例大祭

江戸時代初期に著された『歳序雑話』や明治時代初期の「熊本年中行事図絵」によると、現在の例大祭にあたる祭りの名称が「放生会」であったこと、現在と同様に馬追いや随兵、能が行われていたこと、祭りの煌びやかな様子がわかるほか、桟敷などが設けられて多くの人々が見物に来ていたことが伺える。

馬追いの様子（「熊本年中行事図絵」）より

③現在の例大祭

ア　祭りの奉納

祭りの主体は藤崎八旛宮で、その他、参加団体は以下の通りである。なお、奉納日時は平成30年（2018）例大祭の日程を基に記述する。

a　獅子舞

概要

獅子舞の奉納は、江戸時代から続いており、江戸時代中～後期作成とされる絵図（「藤崎八旛宮祭礼絵巻」）や明治時代初期の「熊本年中行事図絵」にも描かれている。この奉納は、加藤清正が朝鮮出兵から無事帰還することができた報恩として藤崎八旛宮の神幸行列を再興した際、新町が獅子舞を奉納したものが始まりと伝えられる。

獅子舞の様子（「熊本年中行事図絵」より）

新町獅子舞「天拝」

舞は歌舞伎調の優美ななかにも豪華で格調高く、熊本市の無形民俗文化財に指定されている。獅子は赤獅子（雄）と黄獅子（雌）の二頭で舞い、例大祭ではお祓いを受ける「飾卸（かざりおろし）」のあと、拝殿前で「天拝（てんぱい）」と「牡丹（ぼたん）の舞（まい）」が披露される。中でも「天拝」は年に一度、例大祭のためだけに舞われる特別なものである。「牡丹の舞」は明治時代に歌舞伎役者が来た際に地元に伝授されたものだと伝えられ、大きな牡丹の花車（はなぐるま）に戯れながら舞う。例大祭最終日の神幸行列では、花車とともに行列に加わり、御旅所まで練り歩く。獅子の後方には頭に大きな張子の花を飾り色鮮やかな唐人服を着た子供や、多くの勢子（せこ）が連なり、華やかな行列となる。

獅子は、新町会館において展示されており、建物外部からも獅子の姿を望むことができる。

伝統的工芸品の技法

昭和 40 年（1965）ごろの獅子
（新町獅子保存会所蔵）

獅子舞に使われる獅子頭は、熊本県の伝統的工芸品である「おばけの金太」を製作する厚賀（あつが）氏が代々製作や修理に携わっており、「おばけの金太」同様張子の技法で作られている。張子製の獅子頭は、明治時代初めに熊本に来た歌舞伎役者から獅子舞を伝授された際、6代目が木製ではなく張子製の獅子頭を製作したものと伝えられる。昭和40年（1965）ごろに撮影された写真に９代目厚賀新氏作成の獅子が写っており、遅くともこの時期までは厚賀氏による獅子頭製作をさかのぼることができる。

牡丹の花車と獅子

現在の獅子頭は、昭和34年（1959）に製作されたといわれる木型を基に、10代目の厚賀新八郎氏によって平成26年（2014）に新調されたものである。獅子とともに神幸行列に加わる唐人服の子供の頭を飾る花や、牡丹の舞

で使われる花車の牡丹の花も厚賀人形店で製作・修理されており、伝統的工芸品の技術が現在も獅子舞を支えている。

b　神楽（かぐら）

肥後神楽は球磨（くま）郡を除く全県下に広く伝承しており、県重要無形民俗文化財に指定されている。現行の神楽がいつごろ成立したかは明らかではないが、遅くとも18世紀前半には行われていたのではないかといわれている。昭和16年（1941）に神職による保存会が結成され、現在は熊本市内などの神職に伝承されている。

神楽の奉納

藤崎八旛宮の例大祭において奉納される神楽は、「藤崎宮祭次第書上」（寛永10年（1633））で「神楽屋」（神楽を舞うための建物）の記述があることから、この時期にはすでに始まっていたとみられる。「真栄木（まさかき）」・「剣弓（けんきゅう）」・「二剣（にけん）」などからなる十二座で構成され、清楚で簡潔な趣の舞である。鈴を右手に持ち、左手には榊（さかき）や剣や弓や長幣（ちょうへい）などを持ち、一人か二人か四人で舞う。神楽殿における奉納のほか、献幣祭（けんぺいさい）では拝殿前で奉納される。

c　町鉾（まちほこ）

町鉾の奉納は寛永10年（1633）の記録（「藤崎宮祭次第書上」）で確認でき、この時期にはすでに始まっていたとみられる。江戸時代後期や明治時代初期作成の絵図にもあり、明治時代以降も数十基が奉納されていた。鉾の数が次第に減少し、平成７年（1995）以降一時休止したこともあったが、平成23年（2011）から再開している。現在の町鉾は、江戸時代の絵巻を基に製作されており、平成30年（2018）例大祭では町鉾３基、武者首鉾２本が奉納され、神幸行列で練り歩いた。写真は、例大祭の第１日目に拝殿までの広場で行われる飾卸（かざりおろし）（お祓いを受けること）の様子である。

町鉾の飾卸

d　献茶

献茶は、第２日目に拝殿内で行われる。藤崎宮ならびに茶道肥後古流関係者によると、昭和45年（1970）の例大祭から奉納されるようになり、当時の氏子総代と茶道肥後古流・的々社の武田氏との縁から奉納されるようになった。肥後古流とは、熊本藩で伝承された茶道の流派の一つで、茶道を大成した千利休の流儀をそのまま伝えているとされる。

奉納献茶

e　飾馬

飾馬の奉納も「藤崎宮祭次第書上」に見られる。飾馬は特徴的な飾り物をつけた馬のことで、町内会や学校の同窓会などが奉納して勢子と共に神幸行列に加わる、神幸行列最大の呼び物である。江戸時代は10頭前後の参加であったが、現在は多くの団体が参加する。飾馬の周りには一団体あたり200人ほどの勢子がついて「ドウカイ、ドウカイ」と掛け声を上げ、非常に賑やかである。

飾馬

祭りへの参加団体数では飾馬が最も多く、平成30年（2018）は企業や学校の同窓会など70団体が奉納し、約15,000人の勢子が参加した。

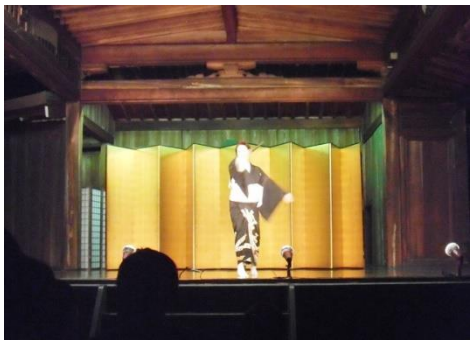
平成 30 年（2018）例大祭　飾馬参加団体

1	鳥居基	2	水道町	3	建吉組	4	桜會	5	熊城会
6	熊本隼大	7	こ粋連	8	望星会	9	本山流會	10	知友會
11	剛友會	12	愛好会	13	高麗門	14	風神會	15	なみあし會
16	光龍會	17	肥後睦	18	颯爽會	19	同志会	20	西峰會
21	絆	22	肥後葵會	23	北辰會	24	馬道會	25	東雲會
26	熊工會	27	熊花会	28	京陵會	29	JR 燕會	30	一新会
31	江原会	32	若藤會	33	龍誠会	34	竜胆会	35	NTT 会
36	上通会	37	託東會	38	肥後一會	39	蛇の目會	40	雅會
41	九学会	42	椿會	43	悠神會	44	下通会	45	熊本凌

46	肥後眞會	47	誠友會	48	翔青會	49	西連會	50	同心會
51	最好會	52	道乃會	53	紫紺会	54	みゆき会	55	不知火会
56	め組會	57	慶徳会	58	二本木会	59	よ組會	60	北勢会
61	武蔵連合會	62	横山會	63	若獅子會	64	清城会	65	市組
66	祭郷会	67	誠真会	68	幸友會	69	青嵐會	70	一心会

ｆ　日本舞踊

藤間楨珠社中（ふじまていじゅしゃちゅう）による日本舞踊の奉納は、例大祭第３日目に藤崎八旛宮敷地内の能舞台で行なわれる。平成30年（2018）には18曲が奉納された。


奉納舞踊

日本舞踊の奉納がいつから行われているかは不明であるが、昭和37年（1962）９月13日の熊本日日新聞に奉納舞踊の記述があることから、遅くともその時期には行われていることが分かる。

ｇ　いけばな

挿花（そうか）の奉納は、例大祭第３日目夕方以降、楼門から拝殿のあいだの回廊で行われる。昭和２年(1927)８月31日の九州日日新聞には記載があるため、遅くともその時期には開始していたものと考えられる。当時は上流階級の女性が奉納しており、一種のステイタスとみなされていた。現在は、いけばな実行委員会が奉納しており、池坊（いけのぼう）・草月（そうげつ）流など複数の流派が花を活ける。

奉納挿花

h　能

御旅所御能

例大祭における能奉納の歴史は古く、平成30年（2018）例大祭では第410回目を迎えた。400年以上続く演能は日本国内においても非常に珍しいといわれる。『歳序雑話』（天和３年（1683））などの江戸時代の史料にも、能の奉納があったことがわかるものが複数みられる。江戸時代、御旅所（旧御旅所）には「藤崎御旅所御能場」があり、その能舞台で奉納されていた。明治10年（1877）の西南戦争後、御旅所と能舞台は現在地へ移転し、能の奉納が続けられている。能の奉納は金春流と喜多流が担い、神幸行列が御旅所に到着したあと、御旅所の能舞台において「翁（おきな）」・「高砂（たかさご）」などが奉納され、多くの人が見物に詰めかける。

イ　祭りの日程

例大祭の日程は、年ごとに異なるため、平成30年（2018）例大祭の日程を記述する。

a　第１日目（９月13日）

第一日祭

現在の例大祭は、第一日目午前０時の宮遷式の神事から始まる。これは神殿の神を神輿に遷す神事で、密かに行われる。

午前９時30分から総代清祓（きよはらい）が拝殿内で行われる。午前10時から第一日祭が拝殿内で行なわれ、神職と総代が拝殿に入り、拝殿内の「一の宮」・「二の宮」・「三の宮」に対して神饌（しんせん）が供えられる。午前11時より新町獅子（新町獅子保存会）の「飾卸（かざりおろし）」（お祓いを受けること）が拝殿前の広場で行なわれる。新町獅子は、「飾卸」のあと拝殿前で「天拝」と「牡丹の舞」を披露し、拝殿前や回廊には近隣住民や小学校・幼稚園など多くの見物人で賑わう。獅子舞の披露が終わると、無病息災などを願って獅子が集

一の宮・二の宮・三の宮

まった見物人や子供たちの頭を咬んで回る。

午後３時から、藤崎八旛宮内の神楽殿で肥後大神楽会による神楽の奉納が行なわれる。そのほか町鉾や奉納神輿の飾卸もこの日に行われる。

ｂ　第２日目（９月14日）

第２日目には、午前10時から第二日祭が行われ、第一日祭同様、拝殿内のお宮へ神饌が供えられる。午後からは、奉納献茶が催行され、肥後古流的々社の代表者が拝殿内で茶を点てて奉納を行う。また、飾馬飾卸では、飾馬や勢子たちのお祓いが行われる。各奉納団体の飾馬と勢子が鳥居から入り、楼門前の広場で勢子が掛け声をあげながら馬を引き回して退場する。多くの勢子と見物人が境内に詰めかけ、大いに賑わう。

飾馬飾卸の様子

ｃ　第３日目（９月15日）

午前10時から献幣祭（けんぺいさい）が執り行われる。献幣祭とは、神社本庁より献幣使が携えてくる幣帛（へいはく）を神前に奉り、祝詞（のりと）を上げる神事で、幣帛等を神前に供えたあと、巫女舞や神楽が奉納される。回廊に多くの椅子が並び、神社関係者や総代・奉納団体の人々などが参列する。午後からは随兵三役清祓（ずいびょうさんやくきよはらい）が行われ、神幸（しんこう）行列に随身する随兵頭・長柄頭（ながえがしら）・神幸奉行がお祓いを受ける。夕方、能楽殿において藤間楨珠社中によって日本舞踊が奉納される。

献幣祭の様子

ｄ　第４日目（９月16日）

例大祭当日であり、この日に神幸祭が行われる。藤崎八旛宮から御旅所へ向かう神幸行列に参加する飾馬は、例大祭最大の呼び物である。

ウ　神幸行列

当日の午前５時ごろ、境内から参道にかけて御宮や神輿、随兵、飾馬など総勢約20,000人・馬約70頭が集合する。御宮や神輿、随兵は境内で出発式を行い、飾馬の奉納団体は近隣の公園など各々の集合場所で出発式を行うと、藤崎八旛宮から事前に指示された参道脇の道（脇参道）で待機する。

繁華街を通過する飾馬

そして午前６時、旧境内地の麓の御旅所を目指し、往復約９㎞の道のりを出発する。行列は、御神輿を中心に、神職・総代・白丁（はくちょう）や随兵、町鉾、新町獅子舞、そして最後尾に飾馬が出発する。神職らは拝殿前で出発式を行い、厳かに参道を進み始める。その後、飾馬の奉納団体は順番になると参道に整列し、藤崎八旛宮に向かって勢子全員で一礼し、出発する。

飾馬の奉納団体は一団体に200名前後の勢子が参加し、揃いの法被（はっぴ）を着て、鉦（かね）や太鼓を叩き、ラッパを吹きながら飾馬とともに練り歩く。威勢よく響く祭りの音は500～600ｍ離れた建物の中にも届くため、行列を中心に、熊本城下一帯が祭礼の雰囲気に包まれる。

随兵

藤崎八旛宮から御旅所までの行程は「朝随兵（あさずいびょう）」と呼ばれる。「朝随兵」の道順は藤崎八旛宮の大鳥居を出たあとに直進して広町（ひろまち）を通過するものと、右折して立町（たてまち）を通過する２通りがあり、1年交代で道順が変更される。広町を通る道順では広町を通過して上通り筋へ入り、立町を通る道順では浄行寺（じょうぎょうじ）の大通りに出たあとに立町を通過して上通り筋に入る。このあと、上通り筋から下通り筋、新市街から古町を通過するルートは、どちらも同じ道を辿る。平成 30 年（2018）の例大祭では立町を通過した。

途中、上通り筋と下通り筋のあいだにある通町筋のスクランブル交差点では、熊本城の天守閣を背景に神幸行列が通過し、江戸時代から続く祭礼と熊本城を同時に見ることができる。

熊本城天守閣と神幸行列

その後、下通りアーケードから辛島町（からしまちょう）の交差点を通り、日本銀行熊本支店前へと進む。この場所は神幸行列の見所のひとつで、飾馬と勢子が勢いよく駆ける姿を見ることができる場所となっている。観客の盛り上がりも最高潮となり、付近の野田市兵衛商店や早野ビルなどの歴史的建造物でも祭りの雰囲気を感じることができる。その後、古町ではピーエス熊本センター、ナチュラル＆ハーモニック・ピュアリィ、塩胡椒、西村邸、清永本店といった歴史的建造物を背景に西唐人町通りを進み、江戸時代から続く「一町一寺（いっちょういちじ）」の町割と冨重写真所や大石蕎麦、早川倉庫、旧住友銀行熊本支店など明治～昭和初期の建造物が残る町並み全体に祭りの音が鳴り響く。

ピーエス熊本センターの前を通る神幸行列

西唐人町通りを抜け、行列は明治８年（1875）に坪井川に架橋された明八橋の際を通過し、新町へと入る。新町では、電車通りに面する長崎次郎書店・吉田松花堂といった歴史的建造物の前を通過し、祭礼と町並みとが一体となった景観を見ることができる。城下町に残る祭礼と明治時代に建てられた歴史的建造物、大正時代に整備された市電とが同時に目に入り、歴史の重層性を感じることができる観覧場所である。

新町に入ると、広町ルートの場合には、吉田松花堂手前の交差点を右折して新一丁目通りから迂回して御旅所へと到着し、立町ルートの場合には電車通りを直進する、２通りの道順をとる。

電車通りを通る神幸行列

長崎次郎書店と町鉾

御旅所の手前まで行列が進むと、神輿や神職、随兵は御旅所へと入るが、飾馬の奉納団体は各々の所定の休憩場所へと向かい、午後２時からの「夕随兵（ゆうずいびょう）」に備える。休憩場所は近隣の公園や広場などだけでなく、熊本城の二の丸広場や三の丸広場、古城堀端（こじょうほりばた）公園などで、熊本城の石垣や建造物を背景に馬や勢子が休憩する様子を見ることができる。

三の丸での飾馬の休憩の様子

行列は午前８時半ごろに新町の御旅所に到着し、「一の宮」・「二の宮」・「三の宮」が並べられたあと神事が行われ、各宮の前に神饌が供えられる。御旅所には能舞台があり、午前９時から、喜多流・金春流によって能が奉納される。能は奉納行事のなかでも非常に歴史の長いものであり、平成 30 年（2018）で 410 回目の奉納となった。

御旅所での神事の様子

能の奉納

御旅所から藤崎八旛宮への帰還は、同日の午後２時に御旅所を出発する。朝随兵とは異なるルートで藤崎八旛宮へと向かう行程で、「夕随兵」と呼ばれる。夕随兵は朝随兵と同じ順番で出発し、新町の新桶屋町通り、職人町通りを抜け、明治時代に建築された藤本邸などを背景に行列が進んでいく。

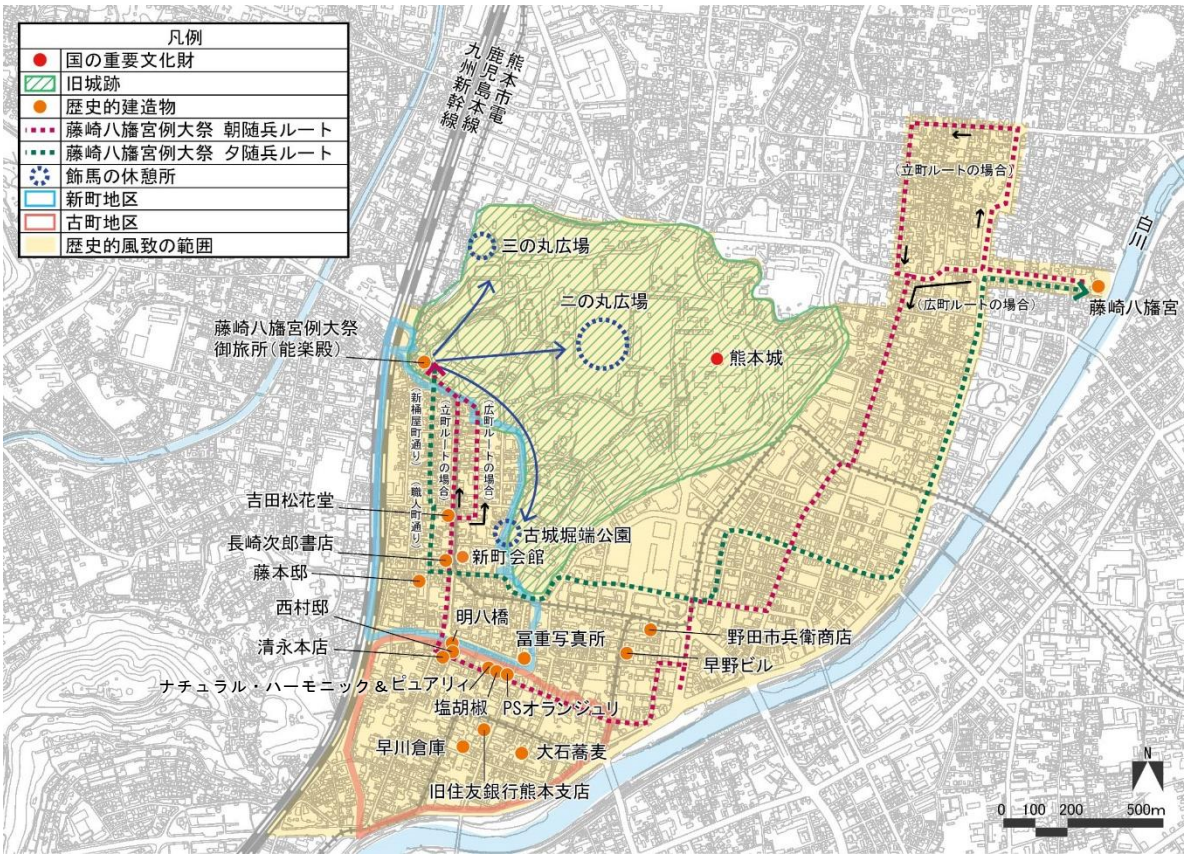
熊本城の総構（そうがまえ）の重要な門のひとつであった高麗門（こうらいもん）の跡や、そこから細川家の墓所である妙解寺（みょうげじ）跡へと続く御成道（おなりみち）の跡、江戸時代の町割りが残る一帯に祭りの雰囲気が広がる。

その後、熊本中央郵便局から桜町を通り、下通り筋を東西に横断する銀座通りを通り抜け、国道３号線を北上する。神幸行列が参道に入り、飾馬が現れるころにはすでに日が暮れているが、各奉納団体は祭りの締め括りにより一層の賑やかさを見せる。神輿や神職、随兵は行列の流れのまま境内に入るが、飾馬の奉納団体は鳥居をくぐって楼門前の広場に集まり、代表者が最後の挨拶をして解散となる。

最後に、深夜に神職らによって神輿から神殿へ神を遷す宮遷式が行われ、例大祭は終了となる。

（４）まとめ

新町・古町は江戸時代の古い町割を残したまま、明治時代から昭和初期に建造された歴史ある建造物が点在し、旧城下町の面影を色濃く残している。その城下を経由しながら江戸時代から続く祭礼の行列が練り歩き、古くから続く奉納神事が行われ、城下町の風情をかもし出している。近代以降に建造された町屋などの歴史的建造物を背景に、江戸時代から続く祭礼が一体となった景観となっており、特徴的な歴史的風致を形成している。



城下町の祭礼等にみる歴史的風致の範囲

［コラム］　熊本の能楽

【能楽の始まり】

奈良時代に伝来した「散楽」が娯楽を求めた人々に応えてきた芸人たちによって、日本古来の芸能と融合して発達した「猿楽」が平安時代から芸能の主流となり、農村の芸能であった「田楽」も鎌倉時代から南北朝のころに発達した。「猿楽」や「田楽」は劇形態の芸や寺院の法衣の余興として伝統演劇の基礎となった。

【熊本の能楽】

肥後に入国した加藤清正は豊臣秀吉や徳川家康の能への愛好ぶりを目の当たりにしていたことから、大名間の社交に果たす役割の大きさを認識し、自身でも金春大夫親子に招き能を舞わせた。また、観世大夫を起用しなかったことを家康が不快に思っていることを知ると、観世大夫親子に能を舞わせて莫大な引き出物を与えた。さらに、金春流の能役者中村勝三郎（熊本における金春流の元祖）を五百石で召し抱えている。

熊本では本座・新座と呼ばれる猿楽座（五穀豊穣を祈る「翁」を演じる組織）が早くから活動しており、友枝家を中心とした本座が祇園社（北岡神社）の祭礼に、桜間家を中心とする新座は祇園社と藤崎八旛宮の祭礼に神事能を務めていた。また、両社の氏子である商人たちによって組織され、古町が本座で、新町が新座として活動していたと思われる。

加藤家に代わって肥後の藩主となった細川家は初代の細川藤孝（幽斎）以来能を愛好した家で、足利将軍家が観世びいきであったことから藤孝（幽斎）も観世系統の役者を後援した。（永青文庫に所蔵されている記録で能が盛んであつたことが確認できる）

また、二代忠興（三斎）を筆頭とする藤孝（幽斎）の子弟や家臣たちも主従一体となって能を楽しんでいたようである。特に忠興（三斎）は観世大夫の指導を受けた本格的なもので、豊前小倉から移ってからも細川家の能楽愛好の気風は変わらず、三代忠利にも引き継がれ、この気風は幕末まで引き継がれている。

また、八代の松井家は、主家である細川家の歴代藩主が能に親しみ奨励したことから、初代康之のころから能を演じてきており、14代祥之氏（1923～1982）は昭和50年（1975）５月に重要無形文化財「能楽」（総合指定）保持者に認定され熊本の能楽界を支えた。

熊本において伝統が受け継がれている能楽には喜多流・金春流・宝生流な

どがあり、出水神社・藤崎八旛宮・河尻神宮・健軍神社・北岡神社などでそれぞれの祭事の際に奉納されている。

○出水神社

明治11年(1878)出水神社の創建と同時に建立された能楽殿は昭和40年(1965)に焼失した。その後、昭和60年（1985)に八代松井家から能舞台（昭和６年(1931)に旧八代町（現八代市本町１丁目）の豪商であった弓削家より松井家に寄贈されたもの）が寄贈され、昭和61年(1986)に現在地に出水神社能楽殿として移築再建されている。

出水神社では細川幽斎公以来の伝統にちなんで薪能を復活させ熊本の名物にしようと、昭和35年(1960)に第１回目を開催し現在も続けられている。

○藤崎八旛宮

幕末までは段山の御旅所(御能場と云われていた)で奉納されていたが、西南戦争以後藤崎八旛宮が移転したことなどにより、昭和初期、薬師堂跡地に現在の御旅所(能楽堂)が設置され、毎年秋の例大祭時に喜多流・金春流による奉納が続けられている。

○河尻神宮

毎年開催される秋の例大祭において喜多流により奉納されている。河尻神宮では能殿と呼ばれており、およそ90年前に川尻町内の氏子(個人)から寄贈されたものである。

○健軍神社

毎年桜の咲くころ「花の薪能」と題して喜多流により奉納されている。境内に特別に設置された舞台で開催されるもので、平成以後のはじまりである。

○北岡神社

毎年１月５日の松囃子能と８月３日の例大祭において、喜多流・金春流が神社拝殿にて奉納している。また、八代城主松井直之が奉納したとされる能面が伝わる。

移築された出水神社能楽殿

移築された能楽殿本舞台演能
（出水神社能楽殿）

演能（藤崎八旛宮御旅所）

演能（河尻神宮）

演能（健軍神社）

演能（北岡神社）